

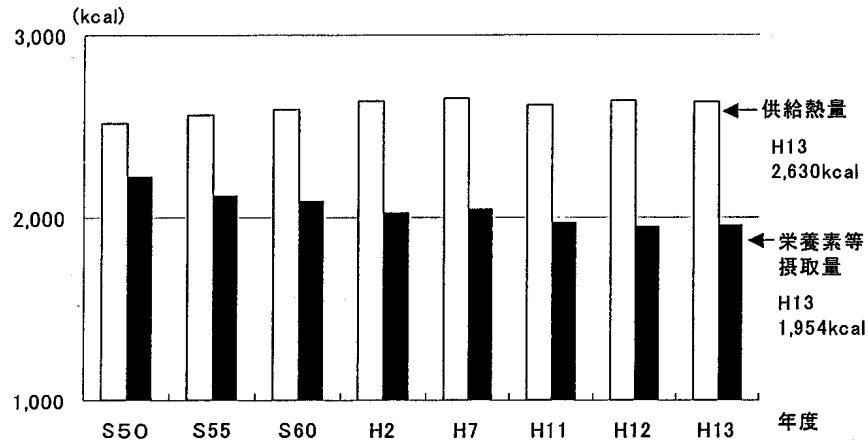
○ 消費

5-1 食生活の変化及び「食」に対する意識の変化

(1) 食生活の変化

○ 食料摂取は飽和水準が継続するなか、欠食習慣の拡大など食生活の乱れが懸念される。果実の1日当たりの摂取量は、目標摂取量150gに対して、現状では概ね120g～130g前後で推移。年代別では、特に若年層で少ない。

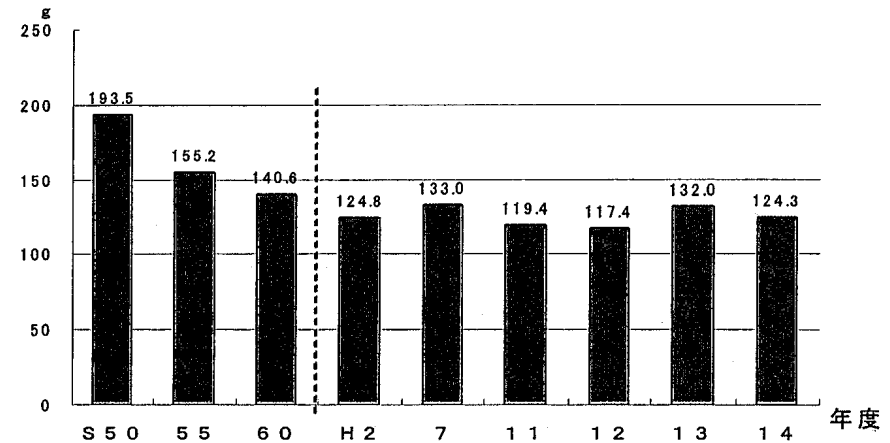
○ 供給熱量・栄養素等摂取量の推移（国民1人1日当たり）



資料：農林水産省「食料需給表」、厚生労働省「国民栄養調査」

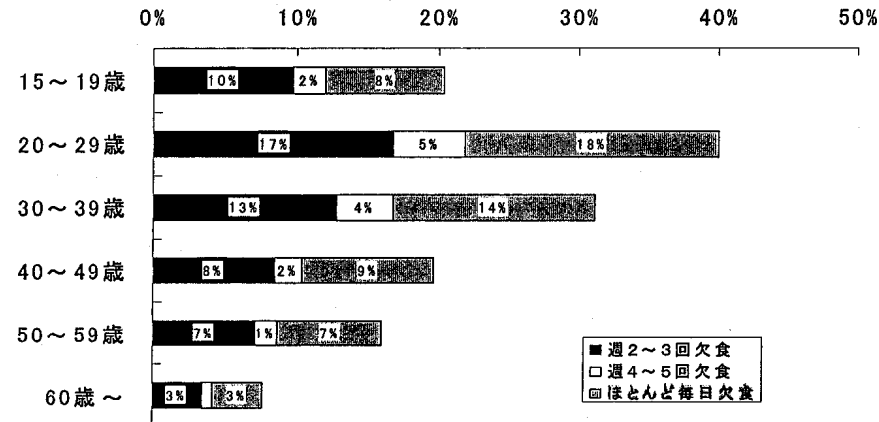
(注) 栄養素等には、3大栄養素のほか、カルシウム、ビタミン、鉄分、塩分が含まれる。

○ 1人1日当たりの果実摂取量の推移



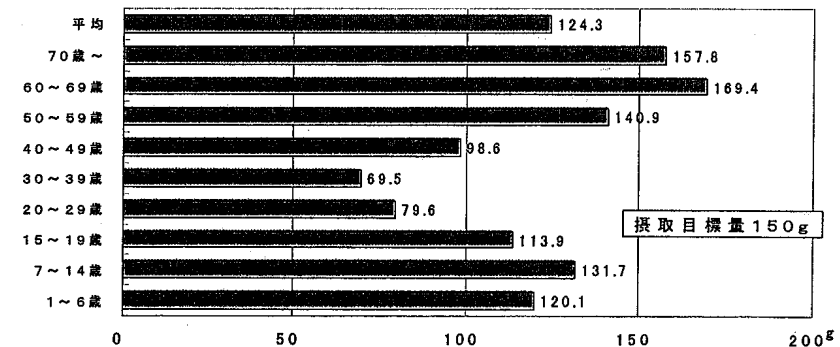
資料：厚生労働省「国民栄養調査」

○ 欠食習慣がある人の割合比較（平成13年、男女計）



資料：厚生労働省「国民栄養調査」

○ 世代別1人1日当たりの果実摂取量（平成14年）

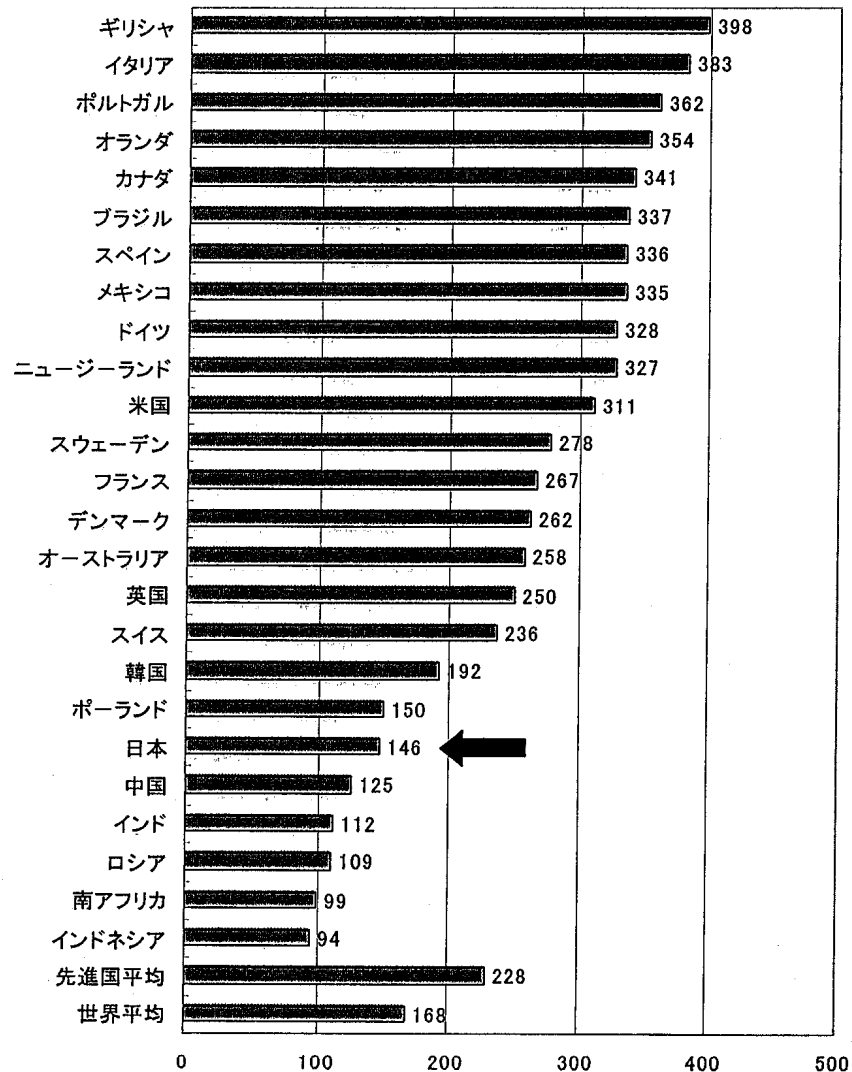


注：摂取目標量150g(可食部)は「日本人の栄養所要量の活用」(平成12年厚生省策定)において定められている。なお、「毎日くだもの200g運動」では、消費者の利便・理解に資するよう、皮・芯等の廃棄部分を含めた全重量として200gを摂取目標量としている。

資料：厚生労働省「国民栄養調査」

○ 果実にはビタミン類をはじめとした多くの栄養素が含まれているが、我が国の果実摂取量は世界的に低水準にある。

○ 1人1日当たりの果実摂取量の国際比較（平成13年）



資料：「FAO STAT Food Balance Sheets」

○ 果実に含まれる栄養素

ビタミンC：発がん抑制やストレス緩和に効果がある。

ビタミンA：成長に必要な栄養素。ビタミンAに変化するβ-カロテンは免疫力を高める。うんしゅうみかんに含まれるβ-クリプトキサンチンは発がん抑制効果のあることが明らかになっている。

ビタミンE：抗酸化作用があり、老化やがん、高血圧、動脈硬化などの予防に効果がある。

ビタミンB群：エネルギー供給や老廃物の代謝に関与しており、不足すると疲れやすくなる。

カリウム：ナトリウムの排せつを促して血圧を正常に保つ。

食物繊維：コレステロールの上昇を抑え、腸内の有害物質の排せつやビフィズス菌の増加を促進させる効果がある。

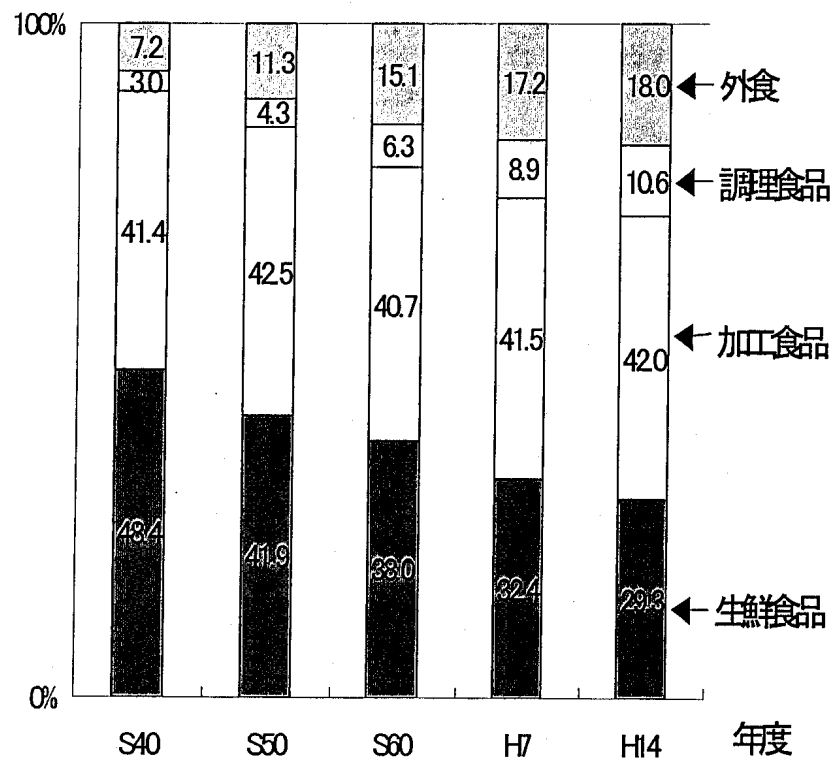
ポリフェノール：果実の色素や苦み、渋みの成分で、抗酸化作用により、生活習慣病の予防に効果がある。

有機酸：鉄の吸収を高めるため、貧血の防止効果がある。
また、疲労物質である乳酸の減少を促進する効果がある。

(2)「食」に対する意識の変化

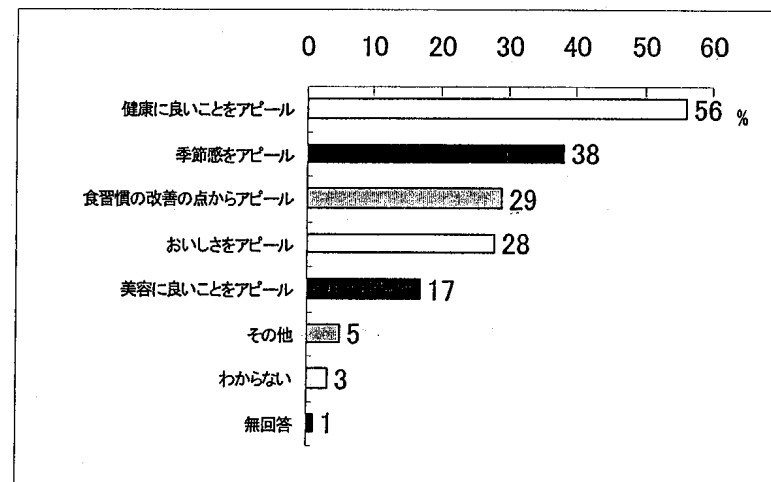
- 家族構成の変化や生活スタイルの多様化等により、食の外部化、簡便化志向が進展している。一方、安全・安心に対する関心の高まりや健康志向の高まり等、消費者ニーズが多様化している。

- 食料消費の用途別支出構成の推移



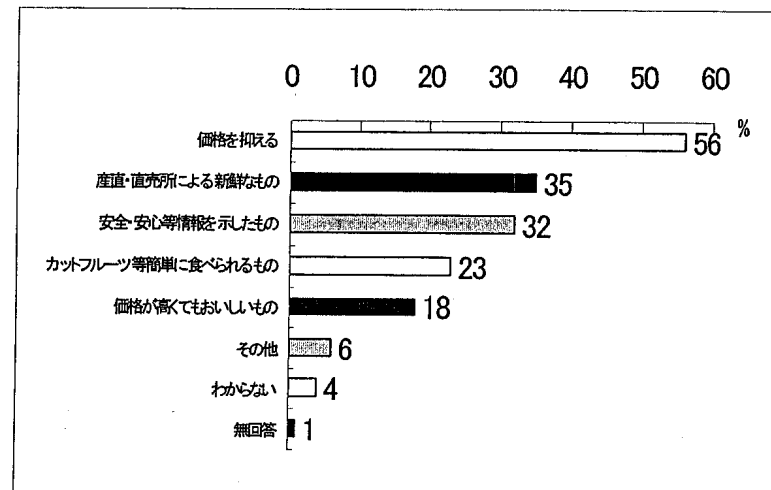
資料：総務省「家計調査年報」からの推計値

- 今後、くだものの消費量を増やす取り組み



資料：中央果実基金「くだものの消費に関するアンケート調査」

- 今後のくだものの提供方法について

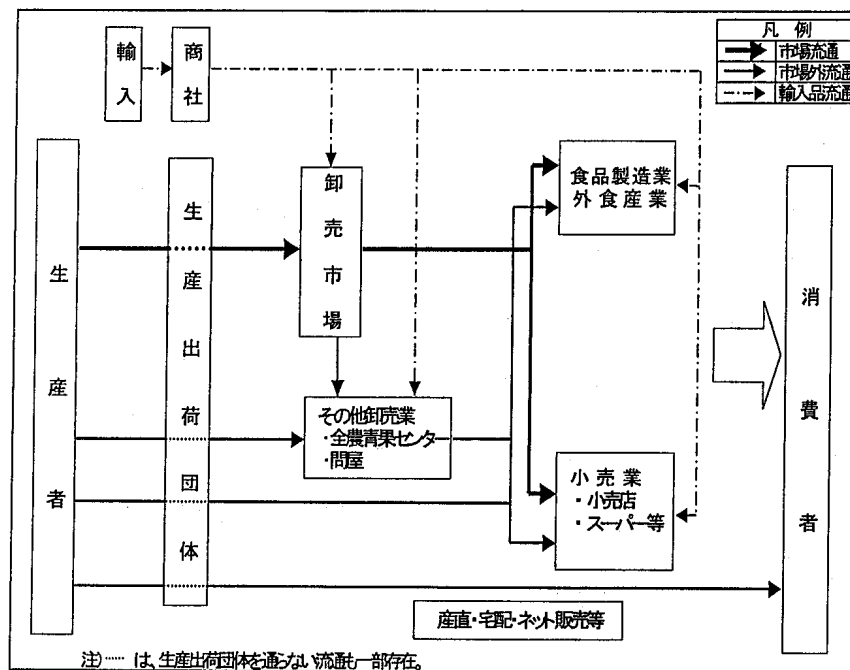


資料：中央果実基金「くだものの消費に関するアンケート調査」

5-2 販売・流通形態の変化

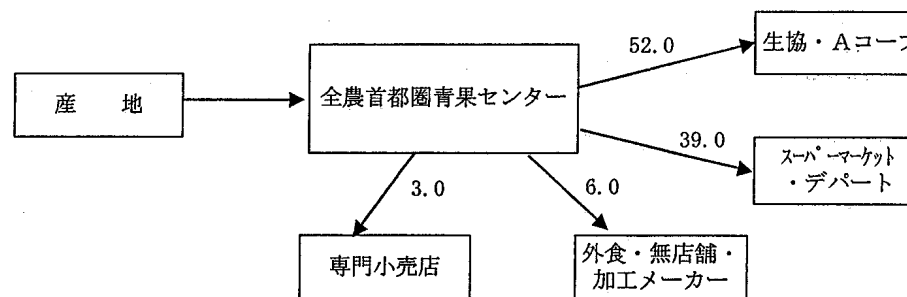
- 果実の流通経路を見ると、大宗（約8割）は卸売市場を経由するものであるが、その割合は年々減少しており、全農、生協等市場を通さない独自の取引、宅配等が増加し、流通が多様化している。

○ 生鮮果実の流通経路



資料：農林水産省果樹花き課調べ

○ 全農首都圏青果センター東京の流通経路



資料：農林水産省果樹花き課調べ

○ 生鮮果実の市場経由率の推移

(単位：%)

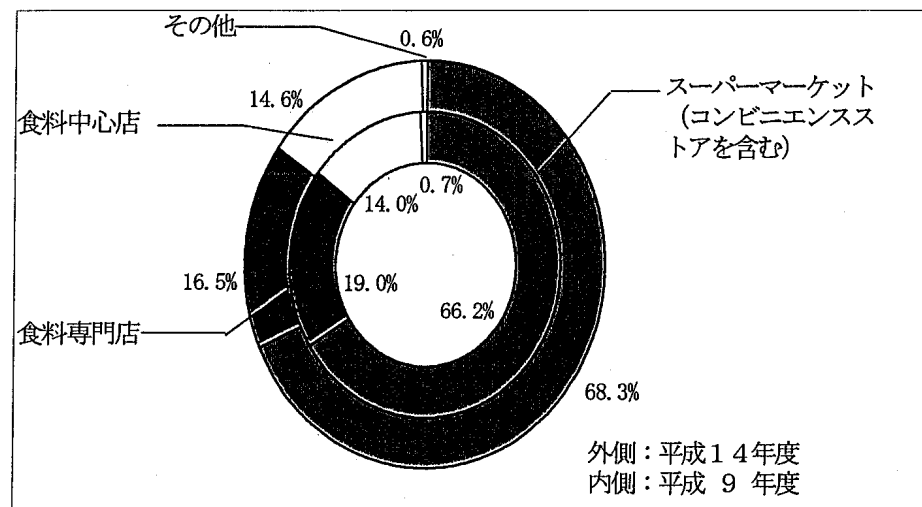
年 度	5 年度	6 年度	7 年度	8 年度	9 年度	10 年度	11 年度	12 年度	13 年度
青 果	80	75	74	75	75	75	71	71	69
うち果実	72	63	63	62	62	62	57	58	54
生食用果実	96	89	95	90	88	86	83	82	80

資料：農林水産省総合食料局で推計

注：生食用果実は、果樹花き課で推計

○ 量販店の販売シェアの拡大、宅配等流通が多様化する一方、世帯員数の減少に対応したばら売り、少量化等販売形態も多様化している。

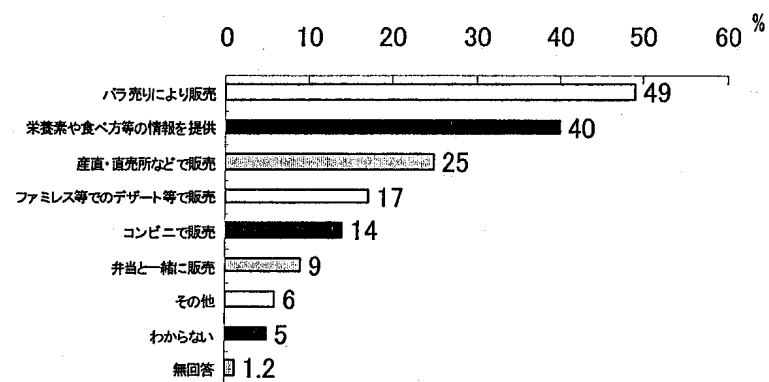
○ 果実の業態別販売割合



資料：経済産業省「商業統計」

○ 今後のくだものの販売方法について

図-12 今後のくだものの販売方法について



資料：中央果実基金「くだものの消費に関するアンケート調査」

5-3 品目の多様化

○ 多様な果実が輸入されているが、国産果実の出荷量が少ない時期に輸入量が增大している。

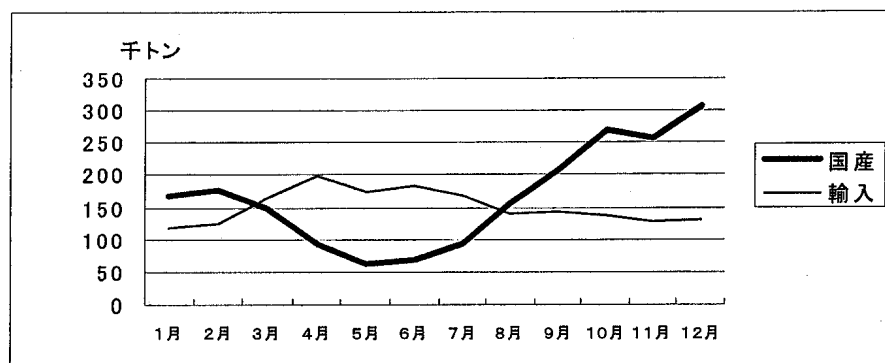
○ 生鮮果実の輸入量

品 目	S60	H2	7	11	12	13	14	15
バナナ	680	758	874	983	1,079	991	936	987
パイナップル	129	128	108	90	100	118	123	123
アボカド	2	2	5	7	14	11	14	24
マンゴー	3	6	10	9	10	9	9	10
オレンジ	112	145	180	90	136	126	104	117
マンダリン等	0	0	7	8	11	12	10	10
グレープフルーツ	121	157	278	262	272	269	285	274
レモン	114	104	93	85	92	84	88	88
ぶどう	2	12	9	9	13	12	12	13
おうとう	2	7	12	16	17	17	14	15
キウイフルーツ	28	59	42	41	42	40	48	50
その他	64	81	106	91	99	101	101	91
合 計	1,256	1,458	1,725	1,691	1,884	1,789	1,744	1,800

資料：財務省「貿易統計」

注：アボカドのうち、S60はマンゴスチンを含む。

○ 平成15年月別国産・輸入果実量（1、2類都市市場の卸売数量）



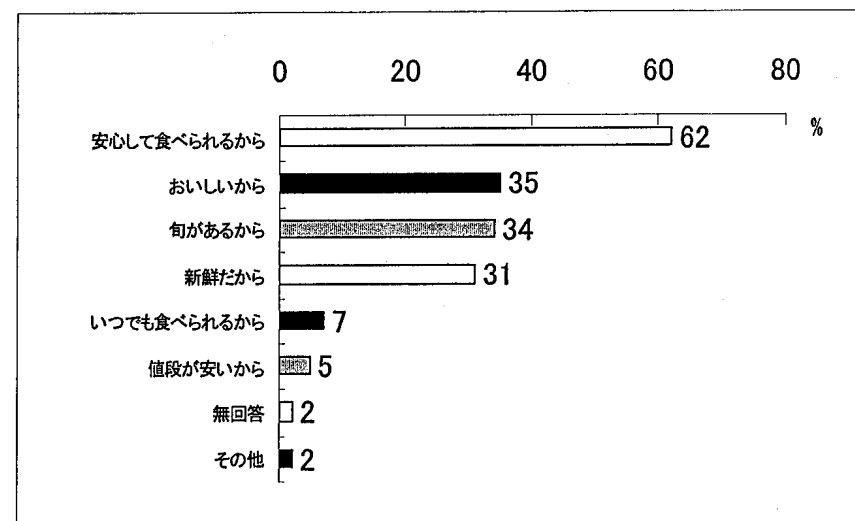
資料：農林水産省「青果物流通統計月報」、財務省「貿易統計」

○ 熱帯果実の輸入数量の変化

	平成5年	平成15年
アボガド	4.6	24.0
マンゴー	9.3	10.3
クアハ・マンゴスチン	0	0.4
パパイヤ	4.8	4.0
ベリー類	0.0	1.9

資料：財務省「貿易統計」

○ 国産生鮮くだものをよく購入する理由



資料：中央果実基金「くだものの消費に関するアンケート調査」